



43 どっちの仕事が辛いのか (ウクライナの昔ばなし)

「家畜を牧場に連れて行って、めんどりとひよこを見張って、パンを焼いて、バターを泡立てて、干しきびをつぶしておいてね。」

「家事より畑仕事のほうが辛い」と言い張る男に、妻は自分の仕事をまかせ、畑仕事に行きました。

まず男は、ハゲタカにさらわれないよう、ひよこたちとめんどりを糸でつなぎ合わせました。

そしてパンの粉をこねながら、きびをつぶす臼を回し、同時にバターも泡立てようと乳脂を入れたつぼをベルトにくくりつけました。

臼を回しだすと、庭でひよこが大騒ぎをはじめました。

何ごとか庭へ出たとたん、男はすっころんで、ベルトにくくりつけたつぼは粉々に砕けてしまいました。

見ると、ものすごく大きなハゲタカが、ひよこたちとつながっていためんどりもろとも空へ連れ去っていきました。

その行方を見守る間に、一頭のぶたが家に入り込み、こね粉やきびをつつき回しました。

「あたしは畑仕事をきちんとやってきましたよ」と帰った妻が言いました。

「あっちの仕事はひとつだものな。こっちの仕事はあれもこれもと、何もかも片づけられるわけがない」と男が言いました。

「でもあたしは毎日やっているのよ。だから家事より畑仕事の方が辛いなんて、言わないでちょうだい。」

男が思うほど、 楽ではなかった家事でした。

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

バックナンバーはロームの文化支援のサイトでご覧いただけます。

半導体のローム 検索

●羊や牛を飼う人々のお話です。

このお話は東欧・北欧を中心としたヨーロッパから、モンゴルなど西のアジア地域に伝わっており、日本や中国、東南アジアにはほとんど広まっていません。前者はもともと羊や牛を飼って生活する地域、後者は稲作中心の地域という違いがあります。この「どっちの仕事が辛いのか」は、羊や牛を飼う人々に伝わる昔ばなしなのです。稲作中心の地域にはこれほど明確な分業がなかったため、伝わらなかったと考えられます。牧畜中心の生活では、大きな家畜の世話に力が要ります。時には忍び寄る家畜泥棒も追い払わなくてはならないでしょう。そのために男が強く、亭主関白である家庭が一般的だったようです。そんな強くて威張っている夫が、自分からやると言い出した仕事で苦勞することに、このお話の面白さがあるのです。

●男の家事下手は先祖ゆずり!?

家事をさんざん失敗した夫に、つい同感してしまう男性も多いのではないのでしょうか。実は、男性は生物学的に見て、多くの仕事の同時処理に向いてないという説があるようです。その理由は脳のしくみ。女性の脳は左脳と右脳をつなげる部分が太く、いろいろな作業を同時にこなせます。ところが男性の脳は一点集中型で、ひとつの事に気をとられる傾向があります。これは人類のはじまりに、男が狩り、女が子育てをしていたからだと言われます。命がけて狩りを

する集中力と、子育てに必要な幅広い気配り。男女それぞれの役割にあった能力(脳力?)が発達したのだとか。しかしこれはあくまでも生物学的な一説で、実際には家事のうまい男性もたくさんいます。また、お話に出てくる夫のように、ひよこの見張りやバターづくりを創意工夫するのも男性的とされる脳の働き。残念ながら今回は裏目に出てしまいましたが、このようなチャレンジが家事を便利にしていってとも考えられますね。

●男の役目? 女の役目?

お話を読めばわかるように、男性が家事・育児をよく手伝う北欧でも、かつては「男は外仕事、女は家事」とされていました。けれど動物の世界をのぞいてみると、男=オスの子育ては珍しくありません。コウテイペンギンのオスは、メスの生んだ卵を約60日間、何も食べずにじっと温めます。断食をつづけたオスの体重は、卵がかえる頃には40%以上も減っていたそうです。さらに驚くのはタツノオトシゴで、なんとオスが妊娠します。といっても、メスがオスのお腹の袋に卵を産みつけるのですが、オスのお腹がだんだんふくらみ、やがて身をよじらせて子どもを出す様子は、まさに母親が産みの苦しみを味わっているようです。このように動物のオスたちも、メスに負けずおとらず子育てをこなしています。でも「どちらの役目が辛いのか」という議論をするのは、人間だけのようです。

昔ばなし監修/昔ばなし研究所所長 小澤俊夫
取材協力/医学博士 米山公啓